新今昔物語

第47話

古堤街道を往く⑩

「太子田に残る樋門の跡」

前回紹介した大神社の境内の片隅に「八ヶ庄弐拾箇村立曾悪水落石門樋」と刻まれた細長い石材が横たわっています。この石材は、かつて当地の二十箇用水普通水利組合の悪水（排水）を寝屋川に排出するための樋門に用いられたものでした。二十箇用水普通水利組合は、豊臣秀吉の文禄堤築堤で淀川分流を断たれた友路岐庄6か村（現・寝屋川市）が淀川堤防に用水樋を建設したのが始まりで、後には現在の大東・門真・寝屋川・東大阪市域にまたがる20か村が加盟するようになりました。最盛期には水路延長約13キロメートルで、約7千ヘクタール（深北緑地約200個分）の田地に水を供給し、当地の農業に欠かせない存在でした。

大神社から80メートルほど東にある明福寺前の路地が、かつて樋門のあった場所で、現在は樋門建設記念碑が立っています。記念碑には、江戸時代後期の弘化2年（1845）12月に樋門が開削され、安政5年（1858）2月には石材を用いるようになり、明治29年（1896）には寝屋川からの舟の出入りが可能となったことが刻まれています。

往時には樋門を通って、収穫物や下肥（肥料用の人糞尿）などを積んだ舟が水路を行き交いました。通行の際には、水路と寝屋川の水位が異なるため、樋門の内側で水位を調節していました。長らく当地の農業を支えていた太子田の樋門は、昭和46年（1971）に埋め立てられましたが、今でも古堤街道の北側では水路の跡を見ることができます。

樋門建設記念碑から東へ300メートルほど進むと赤井地区に入ります。次回からは赤井地区の歴史と文化財について紹介します。

（生涯学習課）

大神社境内に横たわる石材

明福寺前の樋門建設記念碑